

# 文献センター通信

第4号  
2007年9月5日  
一部100円

主な内容	
富士宮交流会へのお誘い	1
キネマ・フェスタ報告	2
布施辰治展	3
文献センター自己紹介	3
富士宮だより	4
映画紹介『サルバドールの朝』	5
運営委員会議事録	6
	8

一昨年七月に富士宮・ふもとの家で最初の交流会、昨年三月には京都で交流会、七月には再びふもとの家で交流会を行いました。今年も当初は七月に富士宮で交流会と予定していましたが、「キネマ・フェスタ アナーキー」を三週間にわたり開催することとなり、九月の実施となりました。

東京で、また富士宮で運営委員が当センター維持のための活動を続けてきました。月例会議の運営委員会における決議事項の要約はこれまでの本ニュースにて掲載してきましたとおりです。

## 第3回富士宮交流会へのお誘い

ただし、アウトラインのみの記述になっているため、実際のところ、どのような状態であるのかは、会員諸氏には想像によつてのみの理解であろうかと思えます。交流会では運営委員による具体的な説明を予定しています。

第二回富士宮集会で承認された規約によれば（七ページに掲載しました）、三年に一度は総会を開くことになっています。年度は一月始まりですので遅くとも次年度が総会の年になります。この総会に向けての話し合いもできると期待しています。

センターを維持するために

は会員数を増加する必要がありま す。所蔵文献のデータベース作成も着々と進んでいます。その利用方法なども検討する必要があります。再度、法人化の検討もはじめようとしています。

東京近辺の運営委員の数も限られ、発想も偏つたものになってい るかもしれませぬ。多くの方の意見を聞き、また連携を強化するた めにも、この話し合いの場を有意義なものにしたいものです。交流会の前には、東京で月例で開いて いる運営委員会も行う予定です。可能な方は参加してください。

\*

日時 九月一五日午後一時～  
一七日午後一時くらい

運営委員会 一五日午後四時～  
交流会 一六日午後四時～  
会場 ホステル ふもとの家  
静岡県富士宮市杉田251  
申込み・連絡 Eメール（奥付参照）または電話0904166410801（佐藤、交流会の終わるまでは、専用になります。）  
アクセス 1. JR東海道線富士駅北口からバス（曾比奈行き）で、新田橋下車。 2. JR身延線富士宮駅からバス（曾比奈行き、または吉原中央駅行き）で、富士脳研病院前下車。※富士宮駅までは、JRのほか、高速バスも利用可。  
3. JR身延線入山瀬駅から、徒歩約25～35分。 4. 当日は、クルマでの送迎も可能です。申し込み・連絡先の携帯電話にて予定を伝えてください。

(次)

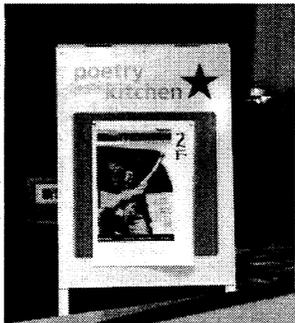


7月21日より毎土日に開催された映画祭「キネマ・フェスタ『アナキー』」はおかげさまをもちまして無事終了いたしました。本映画祭はスペイン革命ドキュメンタリー映画『希望と欺瞞の間に』のDVD・字幕化完成を記念して行われました。各日には、スタッフ責任者がそれぞれの問題意識のなかで映像の選択を含め自由に一日を構成するということ方法で行われました。全

キネマ・フェスタ  
『アナキー』報告

この地の私たち、田中さんのいう闘うことの姿勢、アナキズムという思想系とアナキーという象徴系、性、別とアイデンティティーそしてマイノリティー、革命という事態に限らず問題系として登場する力の機能的集合としての「軍」とりわけ自らの消滅を願う「軍」と暴力の問題、最後に、社会的排除の真っ只中で、伝統的日本的社会の中に色濃く存在する「公

共空間の歴史的不在」という興味深い指摘、そうした排除のなかの国際的連帯の可能性、そしてネオリベラリズムあるいはグローバリズムに対する対抗的視点。それらのさまざまな織り込み、時にはブリーツスカートの襷を広げるように垣間見えた瞬間があったような気がします。例えば、NOG8記録の中で、自らの作っ



会場入り口の看板

たフードを商品経済から離脱した形で供給する抵抗の形がみえるとき、何のことはない今となりでやっっていることが、そういうことなのかという遅ればせながら気づく。こうしたさまざまな織り込まれた問題を鳥瞰図のように眺めて論評することは出来るかもしれません。しかし、やはりそれぞれの問題系の中で、それぞれがそれぞれの網目の延長に、やはり違う所としっかりとつながっていることは少なからず見えたのではないかと思います。



デイビッド・ロービック

# イベント案内

東京・大久保の高麗博物館に於

いて、一〇月二日まで、「布

施辰治 ―朝鮮人民衆と共に

に生きた人権弁護士展」が行

われている。

布施辰治と言えば、山崎今

朝弥とともに戦前戦後を通し

て、社会運動に随伴し積極的

に弁護活動を行った戦闘的弁

護士としてご存知の方も多い

かと思う。

アナキストから共産党、植

民地朝鮮および日本帝国主義

本国における朝鮮独立運動・

反日闘争、東京市電値上げ反

対騒擾事件など数多の刑事弁

護、在日朝鮮人の生活擁護や

借家人同盟の設立、自由法曹

団の設立……近代日本人権史

に残した業績の枚挙には暇がな

い。

## 「布施辰治 ――朝鮮人民衆と共に生きた人権弁護士展」

また、大韓民国においては、最も著名な日本人弁護士として広く知られている。

二〇〇四年には大韓民国政府から建国勲章を与えられ、関連

して布施の母校である明治法

律学校の後身である明治大学

に於いて記念のシンポジウム

も開かれた。

この度、『布施辰治 ―朝鮮人民衆と共に生きた人権弁護士展』と同時に、新宿西教会でも関連の講演会が行われるので合わせて読者諸氏にお知らせする。

電話・FAX: 〇三―五二七二―三五二〇  
<http://www.4onet.jp/~kourai/>

展示期間: 二〇〇七年一〇月

二一日(日)(休館日 月・火曜)

開館時間: 12:00~17:00

入館料: 四百円

### ●講演会

「布施辰治と在日朝鮮人の私

講師: 高史明(作家、著書に『闇

を食む』『現代によみがえる歎異

抄』ほか)

日時: 9月8日(土) 14:00

16:00

場所: 新宿西教会(高麗博物館

むかい)

参加

費: 千円

(入館料

を含む)



布施辰治(ふせ たつじ、1880年11月13日~1953年9月13日) 南字田蛇市巻石郡宮城久林(旧・蛇田村)出身の弁護士・社会運動家。明治法律学校(現・明治大学)卒業。



## アナキズム文献センター 会員を募集!

二〇〇六年三月の京都集会、

七月の第二回富士宮集会を経

て、〇五年來取り組んできた

NPO法人設立を一時期棚上

げにし、文献センターの活動

の実質化を図るべく、当面は

会員制のもとで活動・体制づ

くりを進めてきました。七ペー

ジに規約を掲載しました。

文献センター会員への参加

を広く呼びかけています。

皆様の積極的な参加をお

願いたします。会費は年間一口

一〇〇〇円としていますが、

可能であれば複数口でお願い

いたします。

## 文献センター 自己紹介 3

発端

ことの起りは一九七〇年九月、大阪、尾関弘と私との雑談からであった。その中で“文献センター”が話題となり、尾関弘は、つぶさに体験したローザンヌのCIRA（国際アナキズム研究センター）を語り、日本にもCIRA的な研究センターが必要であると力説した。その頃東京に実現するに至らなかった文献センターの企画があり、多少関わりつつその必要性を感じていた私にとっても、全く異存はなかった。

センター建設は、しかし容易な仕事ではなく、建設にあたっての好条件は何一つ見当らず、また見通しも正直言ってもてなかつた。ただセンターの必要性を確認しただけのことが出来るかを相談しつつまとめられた構想は、概ね次のようであった。とにかく文献や資料を一カ所に集め保管していくこと。現在収集できそうな文献類の四散を防ぎ、少しでも蓄積していくこと。そのなかで、センター建設の条件が揃い、活動を担う適任者が現われたら、それまでに集まった文献、資料類をもとにして本格的な文献・研究センターとして出発したらいい。こんな具合であった。

従って、センター設立とは言うても、一坪程度の簡易倉庫をどこかに設置して、まずは看板を掲げて少しずつでも資料を集めていこうといったイメージであったように尾も希有。そして、その保管場所としては、かつて文献センターを發案したことがあり、尾関弘の知っている龍武一郎の名前が候補にあげられた。早速その場で「設立のよびかけ」の草案をつくり、龍さんとの交渉を私が担当した。文献センター（的）構想は、すでにいくつもあった。先に触れた“実現するに至らなかった東京での企画”とは、表社で計画されていたものである。

——表社では、各地で刊行されているアナキズム運動の雑誌、リーフレット、新聞、ニュース等々を収集し、相互の交流を促進する文献センターの設立を計画しています。（通信より）

表社の文献センター計画については、空間的に限られた事務所では不可能と考え、周辺の人たちにも場所の相談をしたこともあったが、いずれも具体化するには至らなかった。先の手紙文には、「ぼくは表社を中心にセンターを作ろうと、以前から運営会議では何回か提案したこともあったのですが」と書かれている。但し、どのようなイメージであったかは詳らかではない。おそらく、そのようなものを作りたいという願望が先行していて、具体性をもったプランには至っていなかったと思う。うる覚えであるが、どなたか（同志）の敷地の片隅に小さなプレハブでも建てて……という程度だったと思う。というの何かの折りには、その可能性のありそうな人はいないか話し合ったことがあったからである。もちろん、可能性のある候補者は思いつかなかった。

また、石川三四郎の蔵書を中心に文庫をつくらうとする案があったと言う。それぞれ多少のニュアンスの相違はあるが、そこに込められた意図に大差はないと思う。尾関弘は、センター設立の意図を『現代のアナキズム運動』の中で次のように述べている。

（五月革命）に象徴的にみられるように、状況が思想よりは

るかに先行している今日、新しい運動を創出する新しい理論と思想の構築は、ヨーロッパのみならず日本においても緊急の課題である。そのためにもCIR Aの果す役割はますます大きくなっていくだろう。それにしても、そのような重要な仕事は、今のうちに、ミハイロフ夫人をはじめとする少数の個人の、非常な献身によつて支えられている状態に、ぼくたちが甘えていてよいわけではない。日本に住むぼくが、精一杯彼女の仕事に協力、連帯するためにも、同じような目的をもつ研究センターを日本にもつくることを考えた。

日本に帰ってからしばらく、ぼくはこの夢にとりつかれていたが、最近になってようやく数人の仲間の協力を得て、静岡県の富士宮市にそれを建てることに決った。

(次号に続きます)

## 富士宮だより

猛暑・酷暑といわれた日々が何とか終わりを告げた日の夜、なにやら外から花火の音が。玄関を開け、富士山の方を見ると、正面に打ち上げ花火の大輪の輪が見えるではないですか。

花火を見ながらビールでもと思い、急いでビールを取りに戻り、さて、これからと思つたら急に静かになった。もう終わり？ 諦めて部屋に戻り飲み直して三十分ほど経つと、また花火の音が鳴り出し十発位上がるとまた静かに。そんなことを四回ほど繰り返し花火大会は修了した。

その翌日の朝、一時間ほど激しい雨が続き、降りやむとヒンヤリとした冷たい空気に包まれ、一気に秋の気配、虫の鳴き声も気のせいか大きく聞こえ出した。

ふもとの家では、台所の軒下あたりに十センチ位と、十五センチ位の蜂の巣が出来、二十五センチほどのアシナガ蜂が飛び回り、どうしようかと。

自治体によつてはスズメバチの巣は駆除するが、アシナガ蜂は益虫のため駆除しないところもあるという。ともあれ、入り口のすぐ脇なので刺される危険もあり、取り除くことに。近くのドラッグストアで強力な蜂の巣対峙スプレーを買い、ことに臨めば、ものの五分で作業終了。殺虫剤を使わなければ蜂の子も食べられたのに、ちよつと残念。

さて、センターの作業の様子といえ、あいつも変わらず、進みません。派遣の仕事で今年に入ってから新工場に移り、人が少なく忙しいのと、仕事の内容も増え神経の休まることもなく、部屋に帰ってから酒を飲むと、灯りとテレビを点けたままで寝ている始末。休

日ともなれば、掃除、洗濯、布団干し等々時間はあつという間に経っていく。おまけに月に二回は出かけているので、本当に何も出来ません。

言い訳はこれくらいにして、何か一つ位はやつておかないと、思い『リベルテール』誌を創刊号から一九五号（これが終刊号なのかわかりませんが）まで一組揃え、残りをダンボール箱に入れたことぐらいかな。あと、自分の部屋（センター分室か？）にあるダブル本の確認をしようと、ダンボール箱から出してそのままの状態になっています。

九月からは心を入れ替え、作業に励もうと思つています。でも秋はキノコ採りやコケモモ採りでなにかと忙しいんです……スミマセン。

☆ ☆

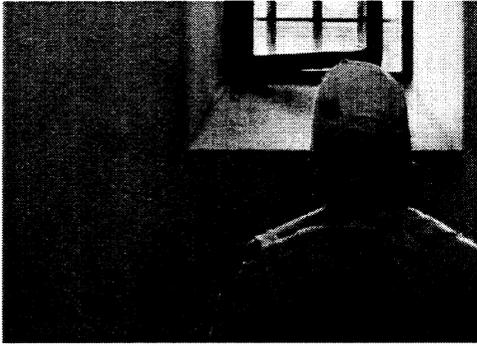
(山田崇正)

# 映画紹介

## 『サルバドールの朝』

(九月二二日より公開)

キネマ・フェスタで上映された二本の映画『希望と欺瞞の間に』『スペインの短い夏』の最初の公開は一九七九年、記憶が確かであれば“新宿の熱い夜”と銘打った連合イベントにおいてであった。盛況を博したことで、日本語版制



作に参加したいくつかの場面を思い出す。

これらの映画は一九三九年のフランコ勝利で幕を降ろしていた。その後、七五年のフランコの死に至るまでの独裁体制のもとでの弾圧と抵抗については、断片的な知識をすら十分に持ち合わせていないが、上映活動に取り組んでい

たわずか五年ほど前に、二五歳の一アナキストが死刑に処せられたことを『サルバドールの朝』が教えてくれた。  
主人公サルバドールが一九四八年バルセロナ生まれといえば、四七年フランコの終身国家首長宣



言で確立された独裁政権下に育ち、長じて反フランコ運動を展開するアナキストグループに参加、その時期はまたフランスの五月革命と重なることになって身近な存在ともなってくる。

物語は、一九七〇年代のスペイン、フランコ政権末期である。反体制グループの活動資金を得るため強盗を繰り返していたサルバドールは、警官との銃撃戦の末に逮捕され、不当な裁判で死刑を宣告される。この物語は死刑執行までの残された時間の中で、家族や友人たちが、彼を愛し、不当な死を回避するため闘った実話——である。また、同原作は、現代企画室から出版予定とのことである。

## Tシャツ販売中!

キネマ・フェスタに合わせて、三つのTシャツを制作しました。サイズは、150、S、M、L、XLの五つ。一着二千円です。収益は、すべて、センターの運営費になります。申し込みは、郵便振替か、メールで、サイズ・種類を明記して文献センターまで。送料は無料です。イレギュラーでも扱っています。



◀ゲバラ

▲キネマ・フェスタ CIRA-J▶

